

レイク諏訪放送大学講座－中間報告－

メディア活用研究班

放送教育開発センターでは、昭和60年12月以来4学期間にわたり、諏訪地域6市町村との連携協力により、放送大学の番組を活用した社会教育事業、レイク諏訪放送大学講座を実施してきた。これに伴い、メディア活用研究班では、諏訪の受講生を対象として、ニューメディアを利用した通信学習指導の継続的調査研究を行ってきた。当該研究は、ファクシミリ通信およびパソコン通信を利用した遠隔学習のための学習指導方法の開発、および各方法の教育効果の比較と測定を主な目的としている。

ここでは、遠隔学習の実態や問題点、また遠隔学習を支えるスクーリングや学習指導のあり方などについて、レイク諏訪放送大学講座において実際にスクーリングや通信学習指導を担当して下さった講師の先生方のご意見を、座談会の形でご紹介する。

レイク諏訪放送大学講座

第1学期担当講師による座談会



日 時 : 1986年8月6日

場 所 : 放送教育開発センター

出席者 : 赤 羽 龍 作 (元信州大学講師・中国語面接授業担当)

飯 田 実 (信州大学教授・英語面接授業担当)

ジョン・ニコラス・ティール(放送教育開発センター助教授・英語面接授業、学習指導担当)

塩 崎 千枝子 (放送教育開発センター助手・学習指導担当)

山 中 速 人 (放送教育開発センター助手・学習指導担当)

山中 本日は、ご多忙のところをご参集いただきましてありがとうございます。先生方には当放送教育開発センターとレイク諏訪放送大学講座が進めてまいりました実験的なプロジェクトにご協力頂き、学習指導や面接授業の労をお取り頂きまして本当にありがとうございました。

今日お集まり頂きましたのは、一応、1学期も終わりました、先生方にこれまでご担当になられたご感想やご意見をお伺いしてみたいと思った次第です。諏訪のプロジェクトにつきましては、今後放送大学をこのような形で全国的に展開していこうという話も一つの可能性として上っておりますので、そうした中に今回の先生方のご経験を生かす事が出来ればというように考えております。忌憚のないお話を伺えればと思います。

まず、スクーリングをどのように進められたか、講義の概要について、それぞれの先生方にお話頂けますでしょうか。

スクーリングおよび学習指導の概要

赤羽 たまたま諏訪では7年に一度の御柱祭の時期に当たり、御柱が終ってからスクーリングを始めるということで、放送大学の番組放送の方は4月から始まっていましたが、実際にスクーリングを開始したのは5月12日です。

それで、スクーリングを始めた時には、もう相当なところまで進度は進んでおりました。入門編の教科書1冊を大体2月でやるわけですから、もう半分近く進んでいたわけです。それで向うの方へ行きましていろいろ学習センターの関所長からお話を聞きましたところ、受講されている方の中には、初めてという方もいるし、大学で第二外国語として中国語をやられている方もおるし、また、自分でずっとNHKのテレビやラジオなどの放送を聞いて勉強されてお方もいるから、そこらの中間を取って、1カ月以上過ぎてはいましたが、まあ入門の辺りから始めてはどうかということになりました。

実際に受講生として申し込んだ方は36名ですが、私の最初のスクーリングに出て来られた方が18名で、始めの時間にどの程度か、初めてなのか、或は少しやったことがあるかを一通り聞いたところが、所長さんが言われた通りに

さまざまで、なかには発音や英語のアルファベットを使ったカナもまだ十分でない受講生も多いという状況でした。

ローマ字記号などは全部自由にこなせるというわけにはなかなかいかないから、どんどん放送を早いスピードでやられても何もわからない。ということで、まあ初めからのつもりでやってもらいたいということでした。それで、初め時は6時から8時15分までの2時間を、ローマ字記号のカナ文字で書いて、その発音から入り、それから皆さんの名前にカナをふって、中国語で読めるかどうか、また、中国語には発音以外に異音声のアクセントがありますから、それも一応復習的なことをしました。本来ならば、もう1カ月過ぎているのですからスクーリングでも皆さんにどんどん読んでもらい、文法的なことも質問してやらなければいけないのですが、とてもまだそんなところまではいきませんでした。教科書のいわゆる復習的なことを、1時間位したところで、一通り18人の皆さんに当てて読んでいただき、初心者から適当な力をもった人までいろいろな方がおられることがわかりました。ですから、なかなかどこに焦点を当てたらよいかむずかしく、ちょっとその辺で面喰ったわけです。

飯田 ご承知のように昨年12月から、仮学習センターが諏訪の方に作られてまして、私の場合は、12月下旬あたりからスクーリングを始めましたが、正直なところ、どういうふうにやればよいのかわかりませんでした。困ったなぁと思っていたところに、たまたま昨年10月下旬に名古屋の杉山女学院大学で、JASETという大学英語教育協会の大会があり、その中で放送大学が大きく取り上げられました。放送大学の各地の学習センターで英語の授業を担当しておられる先生方の実際の授業をビデオテープに取り、それを大会の参加者に見せてくれる、そして更に、その授業を担当している先生方の説明があるという願ってもない機会に恵まれました。これはJASETの理事をやっておられる千葉大学の先生で、放送大学の英語講師をしておられる国吉丈夫先生からそういう話を伺い、それに出てみてはどうかということで、私も出席させていただいたのですが随分参考になりました。

各地の学習センターの授業などを参考にしながら、大体こんなふうなやり方

を試してみたわけです。

まず、5回しかスクーリングがありませんし、英語Ⅰの場合、テキストもかなり部厚いものですので、それを全部万遍なくやることは出来ません。それで今学期は、テキストの中から5課ぐらい取り上げることにしました。昨年12月からの先学期の場合は、今学期の場合と違い、“The Necklace”のストーリーを5回にわたって一貫してやりました。

次に、授業はなるべく英語だけを使ってやることにしました。もちろん講師が英語を話してもあまりわからないという人も中にはかなりいましたが、授業の説明等も出来るだけ英語を使って行うという原則を一応作ったわけです。

3番目としては、こちらから一方的に説明するのではなく、出来るだけ受講生自身の口頭練習を中心にやりたいと思いました。12月以降の英語Ⅰの授業に出席した人達は大体30人前後いましたが、たまたま男女が丁度同数おりましたので二人ずつペアで並んでもらい、ペアを基本に、お互いに会話の練習をしてもらうというやり方をとりました。

4番目に、これはばかに堅苦しい大学や学校の授業とは違うと思いましたので、中には歌を入れたり、どちらかというとき事的なトピック、例えばフィリピンの女性がどうなっているかなど、雑誌などを資料にして時事的なトピックなどを混ぜて出来るだけ楽しくやりましょう、いうふうな気持ちでやったつもりであります。

どの程度成功したかというのはまた別問題ですけれども、一応以上の4つ位の基本方針をたてまして、そんなやり方でやってみました。

そして今学期、つまり今年度の1学期の場合も、大体英語Ⅰの場合は、そういうふうにやりました。英語Ⅱの場合はちょっと難しくて困ったのですが、基本的には大体同じやり方だったと言えます。

ティール 私はスクーリングとは全然関係はなかったのですが、一応2回諏訪に行き、スクーリング的なものを行いました。このプロジェクトでの私の主な責任はパソコンとファックスによる学習指導で、塩崎先生と山中先生と3人で毎週1時間ないし2時間相談しながら学習指導を行いました。

けれども、指導を実施するうちに、コンピュータの使い方がなかなか難しいということに気が付きました。受講生の方々のコンピュータにプリンターがないことに気が付いたのはいつ頃でしたでしょうか。すぐにはわからなかったのではないのでしょうか。

塩崎 1学期の途中、確か5週目か6週目の頃だったと思いますが、一度研究班が諏訪に伺いまして受講生の方々と直々にお会いし、そこでいろいろパソコン通信やファックス通信についての作業上のことなどを話し合った時に、初めてプリンターがないから学習が困難だということがはっきりしたのだと記憶しています。

ティール その時も、まずコンピュータの使い方がわからない人が結構いましたし、プリンターがないから、例えば、私たちが送った長いメッセージを画面で読んで手を書き写さなければならなかったのは、大変苦勞なことだったのではないかと思います。目も大変疲れたと思います。また、uploading(メッセージの一括送信)も downloading(メッセージの一括受信)も出来ませんので、返事にしても質問に対する答えを送ることもなかなか難しい状況でした。だから、最初から人数も非常に少なかったですね。

それから人数は少し増えたりまた減ったりということで、まだまだコンピュータを使うことと、英語の勉強とはうまく組み合わせられなかったようです。コンピュータの問題が第一の原因だったのではないかと考えています。

今度、諏訪の1学期が終わりましたら、2学期が始まる前にコンピュータの練習を十分やった方がいいのではないかと思います。ファックスの方はもう少し使い易かったと思います。

番組やテキストとの整合性

山中 放送大学のスクーリングは、一般のスクーリングとかなり違い、一方には番組の放送があり、また放送と並行してテキストが配られていまして、そしてスクーリングと、この3つがうまく噛み合っていかなければならないのですが、その点について先生方がスクーリングを担当されて感じた問題、例えば

放送番組やテキストとの噛み合わせの問題、またご苦労などについてお話していただけますか。

赤羽 中国語の場合、この2冊の教科書を4カ月でやるというわけです。つまり、入門編を2カ月で、それから講読編を2カ月でやるということで、やはり量が多すぎるのではないかと思いますね。私は、入門編のスクーリングを3回、講読編を2回やったわけですが、例えば入門編でいえば、15課あるところを仮に3回スクーリングを行うとすると、分量が多過ぎますから、結局出来るところは大変限られてきますね。文法的なところなどは、一応ここは一般的に使うというようなところを重点的にピックアップし、しかもピックアップしても教えることができるのは、教科書に載っているうちでもごく一部ということですね。

また、読ませて発音をみるという場合でも、教科書の中から課を選び、その中の部分を各自に読ませて解釈させ、特に文法的なもので必要なものは、そこで説明するというようなやり方をしました。2時間あれば大体十数名、全員の方を当てることができました。発音は上手な人も中にはおられましたし、全然始めからやらなければならない人もおられました。

言い忘れましたが、年齢の構成は10代がなくて20代が3名、30代が4名、40代が6名。それから60代が割合多くて大体6、7名おられましたが、この方たちは昔外地にいたとか軍隊に行っていたとかという方たちで、中国語に郷愁を感じて受講されたようです。そういう方たちは言葉としては話せるのですが、今の新しいカナ使いなどはなかなか読めないわけです。若い方はもう大体早くマスターしているようです。

4カ月で入門編と講読編の2冊ということですが、私は信州大学でも中国語を学生に教えたことがありますが、大学では大体1週間に90分授業が講読が1回と文法が1回あり、1年かかって2冊やるのですが、それでもこんなに厚くはないわけです。ですから受講生のなかには、ちょっと量が多すぎるから、例えば1学期からせめて2学期ぐらいまでは入門編だけを勉強し、発音やある程度重点的なことは入門編の方に出ていますからそれをしっかりとマスターしてから講読編

に進めば、大体辞書を引けば訳せるようになりますので、その方がいいのではないと言われる方もおられました。

ちなみに、一般に市民の人達を対象に中国語を教える時は、たとえば私どもは日中友好の方面の関係で中国語を教えています。そこでの教科書というのは、中国で発行したものを日本にもってきたもので、やさしい所から入って大体1冊130ページくらいです。これが初級、中級とありまして、初級の方をゆっくり1年くらい、1年でまだいけない場合には、その初級を引き続いて2年目もやるという具合で進めています。それに比べますと、放送大学のテキストはかなり量がありますし、内容もちょっと難しいような気がします。

一般に勉強している方は、大学でやられた方でも、卒業して家庭の主婦になったりしてふだんやっていないような方は、テープに取るなどして発音をうんと聞くという程度の復習をしていって丁度いいという感じでしょうね。ちょっとテキストが高尚過ぎるかなという感じもします。

飯田 テキストについては、今の中国語の場合とかなり共通していると思いますが、内容的には非常に興味深い、これは非常に勉強になったという人が多かったようです。ただやはり分量的に多いんじゃないか、あるいは特に後半になりますと格段に難しくなるんです。前半の方は学校の教材用に作ったか、あるいは外国人の英語学習者のために作ったかと思われる教材ビデオだったと思うのですが、途中からガタンと難しくなります。ホームドラマだったと思いますが、その辺のところの抵抗はあったのではないかと、受講生の多くが言っていました。けれど、内容的には非常に面白いからじっくりとやりたい、そういう希望は広く見られたと思います。

次に、スクーリングについてですが、これは私どもは、昨年12月からの3学期が終わってから少し希望を聞いたり、感想を聞いたりしまして、あるいはアンケートの結果がこちらにも来ていると思うんですが、受講生の意見には大きくわけて3つあったと思います。

一つは一部分を細かくやってほしいということ、つまり例えば、「ネックレス」なら「ネックレス」、あるいはどの課でもいいんですが、一つの部分を5

回にわたって密にやって欲しいという希望、それからもう一つは、少しずつとびとびでいいから一カ所に集中しないで、難しい所も混じえて、最初の方から終りの方まで万遍無く4回なり5回なりやって欲しいという希望です。さらに、必ずしもテキストにとらわれないでもう少し別の教材を使ってやってくれとか、まあ大きくわけて3つ位になったと思います。

私としては、人数的にもその2番目の希望が割合に多かったものですから、今学期は、最初やすい所から2回位、後のやや難しい所から2, 3回、というふうにバランスを取ってやることにしました。

ですからテキストおよび、放送番組とスクーリングとの関係というのは、スクーリングのやり方によって、かなりこれから研究して行けば改善出来るのではないかと考えています。

ファクスとコンピュータを使った学習指導に関してですが、これは、実験的に諏訪で行われたわけですが、やはり今の段階ではいくつか問題点はあると思いますその点についてちょっと述べさせてもらいたいと思います。

これはむしろ、ティール先生の方が良くおわかりかもしれないのですが、私自身が感じたところでは、まずファックスの方については、これは扱い方もかなり簡単ですし、また操作のための所要時間も割と短かくて済みますので、多分ファックスおよびコンピュータのモニターになった人達の中で、一番使われたのはファックスではないかと思っています。これについては皆さんに聞いてみると、ファックスは非常に便利だと、これは非常に利用価値が高いのではないかということを異口同音に言っております。

さて、そのコンピュータの方ですが、これは私も最初は非常に期待しました。というのは、ご承知のように語学教育というのは、日本の場合昔から指摘されている所なのですが、読む方については時間をかけてやっているわけです。その効果が上るか上らないかということは別問題として、訳読中心の学校の教育というのはよく言われています。これは、日本の場合一つの欠点として指摘されることです。

欠けているのはスピーキングとライティングであり、これは実際、教えるの

は一番難しい点だと思います。語学のいわゆる4つの技能のなかのライティングがパソコンを使ってやれば補っていけるのではないかという期待を、かなり私自身もっていたのです。将来性としては、かなり大きいものがあると思うのですが、現状ではどうかと申しますとやはり問題点があるようです。

実は私もパソコンでアクセスしようと思って随分長いこと自分なりにやってみたのですが、なかなかうまくいかなかった。また、いざアクセスができて私の知識が不十分なためどうもスピーディーに行かない。どこかでストップしてしまいうまく行かないんです。

それで正直に申しますと、つい数日前に初めて、中西さんというもう70才位になる方なのですが、受講生の中で一番コンピュータのことに詳しく、かつ知的な好奇心が実に旺盛な方で、その上にジャズダンスからエアロビクスまでやっているというスーパーマンみたいな人なのです。その方から半日位じっくり教えてもらいました。それで、ティール先生に私自身も初めてメッセージを送ることが出来たという具合です。

でも聞いてみると、大勢の人がこの点で苦労してきたようでして、これがもう少しうまく行けば、それから説明にもう少しじっくりと時間をかけてもらえば今後うまく行くのではないかと思います。

ただ現状では、諏訪ではエプソンという地元の会社の好意でQC10-2という器材を貸してもらっていますが、私はその機器のせいなのか、それとも他に理由があるのか専門的なことはよくわからないのですが、自分でやってみますとメッセージを送る時に相当時間がかかるんです。これはちょっといらいる、多分こちらの方から送るのはもう少し早く出来ると思うのですが、向こうからこちらに送るのに非常に時間がかかる。また、綴りなんかを間違えて訂正する場合に、かなり面倒くさく簡単に出来ない。これがもう一つの問題です。もう一つは、先程ティール先生もおっしゃいましたが、アップロード、ダウンロードが出来ない、これは今のところ出来ないと言っているのではないのでしょうか。

中西さんは、なんとか工夫してやっというらしいんですが、あれは特別なや

り方で、つまりカセットテープに一旦取り、テープに取った通信音を更にフロッピーディスクに入れる。これはちょっと私も実際にやり方を教えてもらったのですが、ちょっと素人には難しくて簡単には出来ない。ですから直接フロッピーディスクにダウンロードでき、それからアップロードが出来るというそういうシステムが近い将来可能になれば、これは非常に大きな力になるのではないかと、それが出来ないで現状のままだとかなり問題点があるのではないかなという気持ちがあります。まあその辺の所に3つの噛み合い方という点では今後の課題があるのではないかと思います。ティール先生からのご意見を伺いたいんですが、そんなことをちょっと感じました。

テレビの放送番組については、これはもう私自身も素晴らしいものだと思いますし、要はこれをどのように利用するかという利用する側の問題は非常に大きいと思います。

赤羽 私の住んでいる松本地区には放送大学の電波が届いておりませんので、放送番組については私は何ともお答えできませんが、いずれ松本の方にも番組が流れるようになるのでしょう。

ところで、お話によりますと諏訪では2学期もまた中国語を入門編からやるということですが、これは非常にいいのではないのでしょうか。もしそういうことでしたら、たとえば相当に進度が進んでいる方は今度は真ん中から始めれば一層また覚えてきますから、そういう勉強の仕方ができればいいのではないのでしょうか。

飯田 私もそういうふうに考えています。1年位を目安に1冊を大体カバーできるという、そういう目安でやっています。

塩崎 同じ放送内容が4カ月で一段落して、それが1年に3回同じものがくり返されますので、学生の方がずっと継続してとれば、それは各自のペースに合わせて入門からずっとじっくり勉強していけるわけです。ただクルーとすると4カ月で1まとめになっていますから、それでスクーリングの方も完結させてしまうのには困難があるのではないかと思います、いかがですか。

赤羽 ある程度進度の行っている人は、今度この後半の難しい課や講読編か

ら始めようとか、あるいはまだ全然覚えられなかったからもう一度くり返しやってみようとかできるのではないでしょうか。

飯田 それもちょっと難しい所があります。1学期も取って2学期も取る人がいるわけです。3学期どれも全部取りたいという人もいます。そうしたらスクーリングをどうしたらいいかなあと、私も非常に困るわけです。同じ事をくり返すと、また前にやった人がいらっしゃいますから。2つ取ってもだぶらないように少しずつずらしながら、1年間でだいたい1冊終えるという、私の場合はそのように計画を立てて一応出発していますが。

赤羽 前学期からの継続学生はだいぶ多いそうですね。1学期の最後の試験の後、ちょっとみんなで集まった時に、やはり今までやっていた人もだいぶまた引き続いてやるというような事を聞きました。やはりある程度くり返しくり返しやって行けば自然に身につくものです。また、さきほどもお話ししましたけれど、もう相当やっている人がまた発生練習からやっていたのはいけませんから、そういう人達はまた中途からやるようにすればいいと思います。2回とか3回とか、ある程度スクーリングにすればその人は大体この程度だという目安がつくでしょうからそれなりに対応していくようにしたいですね。そのあたりのことは、スクーリングのまた難しい所です。

受講生の特徴

塩崎 今の赤羽先生のお話にもありましたが、1学期だけに限らず、何度も続けて受講したいという方もいらっしゃるようですし、先生方長い間大学の教壇に立ってこられたご経験からみて、この諏訪の受講生の方々は、今まで先生方が教えてこられた学生さんとかなり違う特徴があるのでしょうか。学習態度、また先ほどから出ているレベルの問題など、いろいろお感じになることがおありだと思いますが、その辺についての卒直なご感想はいかがですか。

赤羽 私がお世話になっていた信州大学の教養部では、1年だけだったので、人文の東洋史や中国文学などを専攻する学生、また教育学部の学生では、これから中国から孤児が来るとか、そういう人達と関係があるとかといった点

で、中国語にある程度必要性を感じた学生などが来ました。また、単位をそろえたいという学生もあったかも知れませんが、とにかくダーッと来しました。

私は、3つのクラスにわけてやっていましたが、平均して1クラス120から130名でした。中には実際に学校に出てから一部の個人に教えなければいけないという教育学部の学生とか、人文学部あたりでは東洋史とか、日本史、国語、あるいは中国文化専攻の者とか、取り組む学生には本当に勉強する者もいましたし、あまりしない学生もいましたが、もう大学生ですから力は平均しています。ですからローマ字で読み方を教える またアクセントを教えるという場合にも、平均覚えられましたから、そういう点は楽なんです。

ところが今回のスクーリングの場合は、たとえば、全然ローマ字の教育を受けたことがなく、ローマ字記号の読めない方も中にはおられるわけです。ローマ字を覚えて、それから中国語の読み方を覚えるということの難しさですね。また、中には特に大学生は、発音にしても中国の文書を訳すのにしても、1年やれば相当な力がつく。発音も、今のこちらの受講生の中で発音がいいのは大学でやっていた、あるいはテレビでやっていた方たちが多く、なかにはほとんど完全に近いような受講生もありました。中国語というものは、発音ができてくれば、大体もう60%マスターしたといわれている程発音が重視されるし、また難しい面もあります。2学期も引き続いてやってくる受講生の皆さんが相当にいるのではないかとということを学習センターの関所長さんが言っておられましたが、どうなるでしょうか。

飯田 一般の大学生と放送大学の受講生との違いということですが、まず最初にやはりレベルの問題があります。これは、当然のことと思いますが、一口に言えば大学生の場合よりレベルが多様にあるということだと思います。

まず年令でみますと、諏訪の講座は社会教育ということで入学資格がございませんので、一番若いのは14才位から上は70才を越す位の方までおりまして、当然そこには年令による差というものがあります。

それから職業とか学習歴ですね、英語をどの位やってきたか、その学習の違いということからくる多様さというものがあるわけです。ですから中には優秀

な、ものすごくお出来になる人がおりまして、確か私の記憶では、前年度の試験では殆んど満点に近かった人が何人かいました。

これは余談ですが、大体20代の大学を出てまだまもない女性の方々が一番トップのグループだと思います。20代、それから30代始めの女性がよくできました。特に勉強もよくされたのでしょう。試験問題は、かなりきちんと一通り全部やっておかないと出来ない問題なのです。山を張ってやっても、内容的なことを理解していないと出来ない問題だと思います。あの問題はやさしい、難しいというよりも、かなり真面目にやっていないと行けないと、そういうことだろうと思います。ですからその辺の所でどの程度勉強するかによって、その差が出来たのだろうと思うのですが、そういうこともあります。いずれにしても、まず最初に言えることは レベルの多様性ということです。

2番目に、大学生よりもむしろ勝っているのではないかなあと感じる点があります。この間、放送大学の面接授業で英語を担当しておられる先生方の集まりが東京でありましたが、その時にもそういうご意見が出たようです。

例えば、モチベーション、つまり動機とか、あるいは感心の度合といえますか、そういうものはむしろ大学生の場合には、単位を取るためにやむなくやるという学生も最近多くなって来ていますから、そういう点では、全体から見て諏訪の受講生の方が勝っているのではないかと感じます。レベルの問題はさておきまして、こちらが一生懸命にやればそれなりに敏感に反応してくれます。反応が敏感で反応の仕方が強いということです。特に諏訪の場合、単位というものは認められない、つまり単位を取らないでやってるわけで、今学期の場合は御柱があって少しゴタゴタしましたが、特に前学期の場合で言えば、30人前後で出席率も殆んど変りない。一環して非常に熱心に学習してきました。最後のパーティーなんかも盛大に行われ、楽しい雰囲気で行ってきたということが言えると思います。

3番目としては、これも今の話と相当関連があると思いますが、教師と受講生との間の個人的な親密さというのですか、そういうものが大学よりも市民を対象にした方が緊密という感じがします。中には、よく顔を合わせる友達みた

いな人もいますし、小さな町のことでですから、すぐ仲良くなるということもあります。講義やスクーリングが終わった後でも町でバッタリ出逢って話をするとか、そういうことがありますし、そういう面では、今の大学教育なんかに失われているある面というのが、この中で生かされている感じも受けました。

ですから私、地元の新聞特集に取材された時に、アメリカのコミュニティ・カレッジなんかの雰囲気があるのではないかと言ったことがあるのです。例えば、年令が多岐にわたるとか、あるいはレベルの点では必ずしも一定していないかも知れないけれども、非常に意欲的に取り組んでいるとか、ある仕事を持ちながらどういうふうに勉強しているか、そういうところから来るプラス面というのがあるのです。内容に対する反応の仕方も、そういうところからもうちょっと、大学生などよりも深い反応があると思います。同じドラマを見ても、それに対する反応の仕方が非常に身につまされ、実感があるという人が多かったのです。あのホームドラマは特にそうです。

ですから、全体的に言えば、一方ではレベルの多様さからくる難しさもあるのですが、同時に張り合いもあるということです。教えていて大学生対象の授業にはないような、そういう張り合いも講師は持てるのではないかという感じはしています。最後に私共は、英語のカラオケ大会をやりましょう、ということになりまし、みんなで飲屋に行ったのですけれども、結局英語のカラオケではなくて普通の日本のカラオケになってしまいましたけれども、それも、しかし、そういう市民対象の放送大学であればこそという感じがしました。大学生のクラスではちょっと考えられない、そんなことを感じました。

ティール 今のお話をうかがってちょっと思い出しましたが、諏訪の放送大学講座は、どうも英会話スクールまではいかないですけど、ちょうど大学と英会話学校の間のようなものだなあという感じがしました。つまり大学より堅くなく、けれども真面目ですね。

飯田 なるほど、それは言えてるようです。二つの中間という、確かにおっしゃる通りだと思います。

ティール そうすると学生は、ある程度楽しみながら英語を勉強できる。

飯田 そうですね。たとえ同じ冗談を言ってもその反応がね。楽しみができますね。

学 習 方 法

ティール 年令のこともある程度あるでしょう。大人と大人の対応ですから。ひとつそういった時に私が感じたのは、テレビやラジオで勉強すると、その方法は難しいのではないかということなのです。諏訪の学生はどういうふうに勉強するのか興味がありましたので、私は、諏訪に行った時に聞いてみましたが、全然テレビもCATVが届いていない学生がいるのです。そうすると大体学習センターに行って、普通のカセットに取って、それを持ち帰って何回か聞いて、そうするとテレビの画面を殆ど利用しない。ほとんど耳だけということです。それともむしろ殆ど印刷教材をベースにしているのかなとも思いました。どうでしょう、諏訪の学生はどういうふうに勉強しているのでしょうか。

飯田 おっしゃるように、諏訪の場合は有線放送を利用しています。有線放送の加入率は全国で2位だそうで、甲府について2番目に多いところでして、かなりの家族が有線放送に加入しています。特にここにきて御柱がきっかけになってものすごく加入率が上がったのです。ですから今おっしゃったような、家にCATVがなくて放送番組が見れないという人は段々少なくなってくると思いますが、現在の段階では少しいます。しかし受講生は、CATVが入っているだけでは放送大学の番組を見れないのです。コンバーターが必要なのです。コンバーターは確か1万2千円だったのではないのでしょうか。それで、CATVはあるけれどもコンバーターがないという人が中にはいるのです。放送大学の講座についても、そういう情報を持ってる人が増えていくと思いますし、その点は今後は改善されると思います。また、どうしてもその番組を見たい場合は、学習センターにすればいつでも見られるわけです。

ただ、やはり問題は殆どの人が勤めていますので、時間的に番組を見ることが難しい。確かにビデオ・テープレコーダーを持っている方も結構いますが、

ビデオに撮っておいてもそれを見るという時間は意外ととりにくいものなのです。

いや、実は私もあまり大きな声で言えないのですが、作歌・作句を受講しているのですが、番組を全部見ていないのです。ビデオに全部撮ったんですけれど、意外と時間がないんです。

ティール 英語の勉強という点で考えますと、イントロダクション・トゥ・リビング・イングリッシュ・スピーチということで、そうしたヒヤリングの為ならば、2回や3回聞いただけでは十分でないような感じもしますけれども。何回も聞くべきではないかなあという感じがします。

飯田 そうです。その通りだと思います。ですから、実は、この間の東京の会合の時も出たのですが、各課の一番最後のところでサマリーとして、5分足らずの時間ですが、その課のストーリーを全部まとめてやります。そこだけでも何回も何回もくり返せば、5分のものであれば30分もやれば随分何回も聞けるわけですから、そういうやり方はできると思います。

ティール 放送で勉強すると、何か特別の勉強の方法が必要だと思いますか。

飯田 私は、スクーリングというのが大切だと思いました。というのは、放送はやはり受身になりますし、一諸について言って下さい、というところもあります。ほんの一部だけです。ですからやはり自分で発音したり、あるいは会話をしたりすることが必要だと思います。そういう機会が与えられないと、受身の勉強になってしまいます。ですからスクーリングをもっと増やしてくれという要望はありました。

ティール 15週間でスクーリングが5回だけです。その他は完全に一人で勉強しなくてはならないわけです。

スクーリングの問題点

山中 今、スクーリングの回数の問題が指摘されましたが、時間帯とか、回数、進め具合、教材など、スクーリングに関していろいろな問題があるのではないかと思います。今のスクーリングの持っている問題点、また、こうすれば

もっと良くなるのではないかなというようなことなど、お気づきになった点がありましたら教えて頂けますか。

赤羽 スクーリングの開始の時間です。今は、ここ6時からやっていますが、夏も冬も同じですか。6時と言えば家庭を持っておられる主婦の方は6時という時間は少し難しいのではないのでしょうか。あるいはまだ会社なんかで仕事をされている方もいるでしょう。もちろんこれは、30分遅らせて6時半ならどうかという時間的なことは私は良くわからないけれど、大勢の皆さんから時間帯について意見があったとか、学習センターの所長さんからちょっと聞いています。

それに、私は今学期は火曜日にスクーリングをやっているのですが、曜日の問題もあるようです。

飯田 私も曜日の関係については感じました。私の場合、前学期は日曜日にやっていたのですが、日曜日の方がずっと都合が良いと皆さん言っています。今学期、4月からは金曜日にやったのですが、金曜日の場合は、やはり仕事の関係と、主婦の場合もやはり日曜日の方が出やすいみたいです。ウィークデーの場合は、どうしても足が滞りがちになっています。そんなこともありまして、この2学期は日曜日に戻そうと思っています。日曜日だとまた、違うと思うのです。

赤羽 一応あちらでアンケートか何かをとって、そういう事について関所長さんが何かやっておられるようです。私はまた、2学期も今まで通りに火曜日ということですが、これは勿論、万人に共通していいという日はなかなかないわけですが、その中でも、どの辺が皆の都合に合いやすいかを考える必要があるでしょう。

1回のスクーリングの時間ということでは、お年寄りの方もおりますから、やはり50分やって10分位休憩し、そして後半をやり、まあ、正味2時間程度ということで丁度いいと思います。若い人なら、大学生なら、2時間ぶっとおしでやろうと構わないでしょうけれど。それでも今の大学生は90分位やるともうアップアップといったところでしょう。

飯田 そうですね。語学の時間は90分というと長過ぎます。そういう授業

やってるという大学というのは、世界中どこに行ってもないんじゃないですか、アメリカも50分から1時間位です。ヨーロッパも大体そのようです。どうも日本の大学は旧制高校時代の習慣でやってるようです。ですから、真中当りで一度息抜きをした方がいいかもしれません。

塩崎 先程、スクーリングの回数が少し少ないというご意見が多いように伺いましたが、回数については教えられる先生方の負担の問題しあると思うのですが、いかがですか。放送大学がこれから広域化して行く際にはやはり、信州大学の先生方のように、その地域の先生方にスクーリングなどのご負担をお願いしていく、ということに落ち着くこと可能性として大きいと思いますが、その辺で、そうした時に先生方のご負担というものが一番大きな問題になってくるだろうと思います。それで回数の問題が出てくるのですが、率直なところいかがでしょうか。

飯田 いや、率直なところ、私自身やってみて、私は5回、精々6回位だと思いますね。

赤羽 これは勿論、一般の受講生にしてみれば多いにこしたことはございませんけれども。これはまた当然いろいろと予算の関係等の面もありますし、ですから、やはり今まで通りの5回から6回位で、そしてまた、教える方は、それに対して自分なりに工夫しなければいけないのではないのでしょうか。

山中 集中スクーリングのような形を夏休みあたりに持ってくるとか、そういうようなことはどうかという話も出ているのですが、今回、先生方なさってみていかがですか。集中して例えば、一週間続けて毎日やるという形で本当にこなせるのかどうか、それとも分散してできた方がいいのか、どういうふうにお考えでしょうか。

飯田 私の感じでは、一長一短だと思います。分散方式と仮にいいますと、分散方式でやれば、番組を一貫してやるうえでの刺激というか、或いはきっかけになると思います。ある一定の期間だけではなくて、ずっと全期間にわたって勉強して行かないとやはり追いついて行けないということになりますと、スクーリングの方もずっとやっているという一つの刺激なり、きっかけになると

思うのです。

一方、集中方式でいきますと、語学の勉強はインテンシブなやり方が一番いいんだとよく専門家はいいしますので、効果は上がるかも知れないなと思います。少なくともスピーキングやヒアリングの練習に関しては、効果は上がるかも知れないなという感じはするのですが、私はやってみたことはありませんので、決定的なことは言えません。

ですから、一長一短だと思います。分散式ならば、ずっと興味をつないでいくことが出来ますし、集中してやると効果は上がるのではないかということです。

また負担という点では、集中的にやれば非常に効果は上るけれども負担にはなるでしょう。ある程度は、教師の負担になるかも知れません。ただ、私どもは、毎晩6時半から8時半位まで、1週間分位5回続けるというようなことが夏休みなんかにはあるのですが、私自身はそんなに苦にならないと思うのです。

むしろ、受講生の方が負担でしょうね、毎日仕事があるわけですから。

赤羽 やはり、受講生の方々が多様化で、若い方から相当な年配の方までおられますし、それから普通集中的な講義ということでは、通信教育とかでやっています。あゝいう場合には、教育の免状であるとか、その他の資格をもらうというようなことで、相隆にはっきりした決定的な目的をもって行っていますからそういう場合には、相当な経費はかかっても、あるいはどんな他の事情があっても万障繰り合わせて行って、ということにはなると思うのです。けれども、諏訪レイクの方でやっておられる場合には1週間なり、3日なり、ないしは5日間集中でやるといった時に果して、ある程度参加が可能であるかということについては、ちょっと私はそれほど期待はできないのではないかと思います。この諏訪のような所では、分散してやるより他はないんじゃないかなと、そう感じはしますが。

飯田 スクーリングをしてみて講師の負担ということでは、時間的な意味では4カ月に5回ですから、今回私の場合は英語Ⅰと英語Ⅱの両方あったものですからちょっと違いましたが、それがなければ、1科目につき4カ月に5回で

すから時間的にはそんなに負担になりません。

ただ、授業の取り組み方という点では、これは大学の場合とは違った意味での気の使い方というのがあります。それこそいろいろなタイプの方がおりますので、つまり自分のペースで、あまり相手の反応を見ないでどんどん進めてやっていくわけにはいかないということです。これは、当然のことでそうすべきだと思いますけど、かなり細かい気の使い方が必要になると思います。今日はこういうことをやろうと用意してきたことを反応をみて修正するというようなことは、私の場合毎回のようにありました。そこがまた苦勞でもあるけれど、張り合いというか楽しさでもあるわけです。

赤羽 私も、飯田先生がおっしゃられました通りに、いわゆる苦痛とかそういうことはありませんでした。

ただ、飯田先生がおっしゃったように学生に幅がありますから、勿論初心者の方にはなるべくやさしく、わかるようにしなければいけない。そうかといって、中級に入っている相当の人達が浮くようなことはしてはいけないということで、なるべく私も中国語を使ってやり、それからやさしいようなところを読ませて、またある程度難しい相当なところも読んでもらう。そこら辺のところを気を使うというところが、いわゆる骨が折れるというところでしょう。

教師の方でも、飽きないようにどちらの人達もなんとか興味をもたして、次の時にも欠席しないででてくるようにと、そういうふうなことが多いです。ただ、50位の年配の御婦人の方が2人おられたのですが、始めの時に1回だけ出て来まして、そこで読み方を全部一通りやったあとで、皆さんどの程度かを知るために読んでもらったところが、その方々は読めないわけです。中国のローマ字を使ったカナが読めない。さあ弱ったなあと思ったのですが、その次からずっと出て来られませんでした。そういう場合もあります。

テストを受けた方は11名だったのですが、そのうちスクーリングは出て来なくて、放送だけを聞いていて試験だけ受けたある女性の方は、成績が良くて98点位取っていました。発音も良かったですね。やはり御婦人の方で、主婦の方が100点を取りました。

試験問題についても多少気を使いました。放送大学の試験問題を使うということでしたが、なかなか送って来ないので、私が自分で問題を作ったのですが、関所長さんからは始めての人も多いし、試験問題はそんなに難しいものを出されるとお手上げになってしまうと言われました。勿論中級の方のために講読の応用問題も一行位のものを出しました。応用問題はそんなに難しいものではないので、やはり中級で、前からやっておられた方は殆んど出来たようです。

100点の人は先ほども言いましたように御婦人の方で、試験を受けられた方で、最低は100点満点で68点でした。結局、試験に出て来る方はある程度自信がある方だったようです。

スクーリングに代わるもの

山中 先程、やはりスクーリングはどうしてもあった方が良いということで、最後はカラオケになったと、非常にいい雰囲気になったというお話でしたが、最近では、議論の上では、遠隔学習なのだからスクーリングは、何も人と人が直に会ってやるというような原始的な方法を使わずに、例えば、テレビ電話とか、電子黒板とか、コンピュータ通信だといった、双方向の遠隔メディアによって置き換えていくことが出来るのではないかという議論もあるわけです。そのような議論について、今回は、実際にスクーリングを担当された立場から、どのような御意見をお持ちですか。

飯田 私は、他の科目のことはよくわからないのですが、あるいはそういうことが言えるかも知れません。今後、勉強というのは、やはりスクーリングという形であってもいいし、また他の形でも考えられると思うんですが、いずれにしても実際に、人が何人か集まってお互に話を交わすという、そしてそういう形で練習するという機会をもつことが、必要ではないかなあという気がします。

パソコンについては、私も賛成でして、非常に利用価値が高いと思います。今後、先程申し上げたような点が整理された場合にはですね、リーディングとライティング、特にライティングの練習になるのではないかなと思っています。

例えば、こちらの方でメッセージをティール先生に送るとティール先生が、それを訂正してくださるというような、そういうようなことも、簡単に出来るようになるわけですね。作文の練習になりますね。しかも、それが型にはまった作文じゃなくて、自分で言いたいことを自由にメッセージとして送るという意味では、非常に有力な教育器材だと思います。

ティール しかし、ファックスですと、答案用紙をそのまま使えますね。丸をつけたり、作文の上に正しい英語を書いて、そのまま送り返すということが出来ますが、コンピュータではそれは出来ません。たとえば、英作文の場合、教師は完全に打ち直さなくてはならない。正しく打ち直してそして送り返すということになります。それ程時間はかかりませんが、問題は、受講生が自分の出した答案のコピーをちゃんと持っているかどうかです。持っていれば、元のものと同じく直したものとを比較しながら勉強出来ると思いますが、その辺がちょっと難しいと思います。プリンターがないと非常に弱くなりますね。

飯田 そうですね。プリンターがあることと、それからフロッピーディスクからのアップロードとフロッピーディスクへのダウンロードという機能が整備されないと、自由にどの時間でも打てるというわけには行きませんね。それから機械がやはりもうちょっと早く動くようにならないと。なにしろ遅いんですよ。打っても打ってもなかなか字が出て来ないのでよね。

ティール コンピュータの使い方が、わからないとまず難しい。2番目はタイプが出来ないと、非常に時間がかかる。ファックスの場合はどちらも必要ないのです。自分で手で書いて、そのまま送って、そのまま送り返す。

飯田 コンピュータでは教育は今の段階では難しい、まだ間に合わないということでしょうかね。ファックスの方が評判いいですね。

ティール しかし、モチベーションや魅力はパソコンの方にあるのではないかと、私は感じますけれど。うまく使うととても楽しいですね。

飯田 魅力という点では確かにそうですね。

今後の課題

山中 今後、放送大学は全国化していくわけですが、その時に、先程、塩崎先生の話にも出ましたように、放送大学で全てのスクーリングのサービスは出来ないで、結局、それぞれの地域におられる大学の先生方や、最適な地域の知識人の方々に、協力頂いてスクーリングをしていかなければならないということになると思います。そんな場合ですね、つまり、他の地域でこのような形で当地の先生方をお願いする時に、今回ご経験されて、「私ならばいいんだけど、例えば、他の地域に持っていくときに、こんなことに気を使ってもらいたい」というようないろいろな問題点が出てきたと思うのですがいかがでしょうか。例えば、ザックバランに言いますと、講師料が安過ぎるのではないか、その他にも、講師としての待遇が悪いとかですね、いろいろな問題があるのではないのでしょうか。先生方の今回のご経験に基づいて、こんな点に注意が必要だということがありましたら、教えて頂けますか。

赤羽 そうですね、私の場合、大体定年でもって大学を辞めていますから、その点では一応仕事がない訳ですから、待遇の点で云々ということは私自身としては、さほど感じません。大学の先生として現職でやっておられる方が、どうかということは、私自身としては何も言えないですけど。しかし、先生方、研究その他で忙しい面もありますが、1週間に1度のことですよね。放送大学が今後発展して行く上において、大学の先生方をお願いした場合に、「あの待遇じゃ安過ぎていやだ」と、私は、そういう先生方はおられないのではないかという気はします。本当に忙しい先生に講義をお願いするという場合にはどうかは知りませんが。

飯田 講師の件ですが、実際この放送大学の仮学習センターを、諏訪に設ける準備している時に、何回か交流がありまして、その時にも、ちょっと申し上げたことがあります。諏訪の方では信州大学の公開講座というのが開かれていて、今年で8回目になりますが、私は、一応その世話役みたいのをずっとやってきました。

その経験から考えますと、やはり講師を依頼する場合に難しい点があります

ね。一つは、講師をお願いする場合に、その意義を認めてこれは素晴らしいことだと、自分でも出来るだけ協力をしたいと、寧ろ意欲的に赤羽先生のように、やって下さる先生方もいますし、それから、どうしてもやらなければいけない事情であれば、ひとつの勤めとして、やむなくやるという人もいます。講座をいいものにするには、前者のような講師を、いかに大勢集めるかということになって来ると思います。ですから、あまりに公式的に、例えばしかるべき筋を通して上からやるというようなやり方でいいのかどうか。それを全く無視することは、出来ないかも知れないけど、例えば、これは私の思いつきの考えにすぎないのですが、そういうことに関心のある数人の先生方にチームを作ってもらい、その先生方を中心に、ひとつあるいはいくつかの大学の中から適任者を打診するなり、交渉するというようなやり方も、非常に有力な方法ではないかと思います。

飯田 そのチームというのも、非常に形式的な委員会とか、なんとか言ってしまうと、これまた悪い意味での官僚主義に陥ると思うのです。ですから、なるべくそういうふうにならないようにしないといけないと思います。教育文化というのは、そういうものなのですが、硬化てしまうと駄目だと思います。硬くなってしまうと、どうもうまいかない。できるだけ柔軟に対応していくということは、とても大事な事だと思います。人間の、密接な繋りというものを、大事にしたチームを作っていければ、一番いいのではないかなという気がします。

それから講師のことだけではありませんが、私も半年ばかり、かかわってきていろいろ感じたことが、実はあります。ご参考になればと思って、申し上げます。

もう一つ重要なことは、地域の特性への配慮だと思います。諏訪でやるとすれば、諏訪の特性、甲府へ持って行けば、甲府の特性というように、地域の特性みたいなものが日本中どこでもあると思うんですね。そういう特性を、どのように活かすかということを考えて行って下さると、発展していくのではないかと思います。

例えば、ここでは、このレイク諏訪放送大学講座に係わっても、中心になってやる方達がとかくかたまってしまう傾向があります。それを、バランスをとっていく必要があるのではないかと痛感するのです。

具体的に申しますと、まずこれは、教育事業ですから、大学とか教育関係の方に、一人でも二人でもいいから、代表の人を出してもらおう。また、教育関係に限らず、例えば、私共の場合では、レイク諏訪CATVの山田さんとおっしゃる社長さんは大変熱心で、この方が牽引者の一人となって、企画を引っ張って来られました。こういった企業関係の方にも加わっていただく。また、行政関係の担当者にも加わっていただく。それから、出来れば受講生にも加わっていただく。受講生といいましても、普通の大学生と違い、非常に精神的に成熟した立派な方達が参加しています。例えば、英語Ⅰではルーム長を決めました。この人は、私と同じ位の年配で地方の新聞社の支局長でいらして、楽しい、良い雰囲気を作るのに、大変役立っていただきましたし、いろいろな考え方も持っておられます。こういうふうな方に加わっていただく。

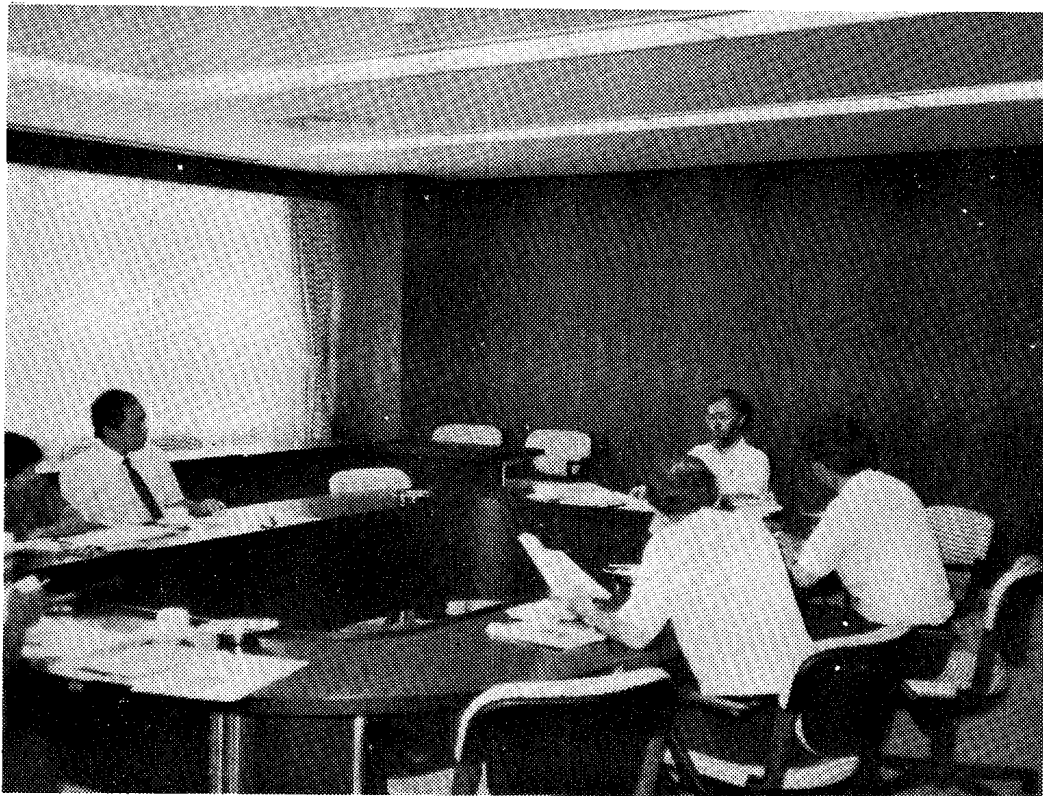
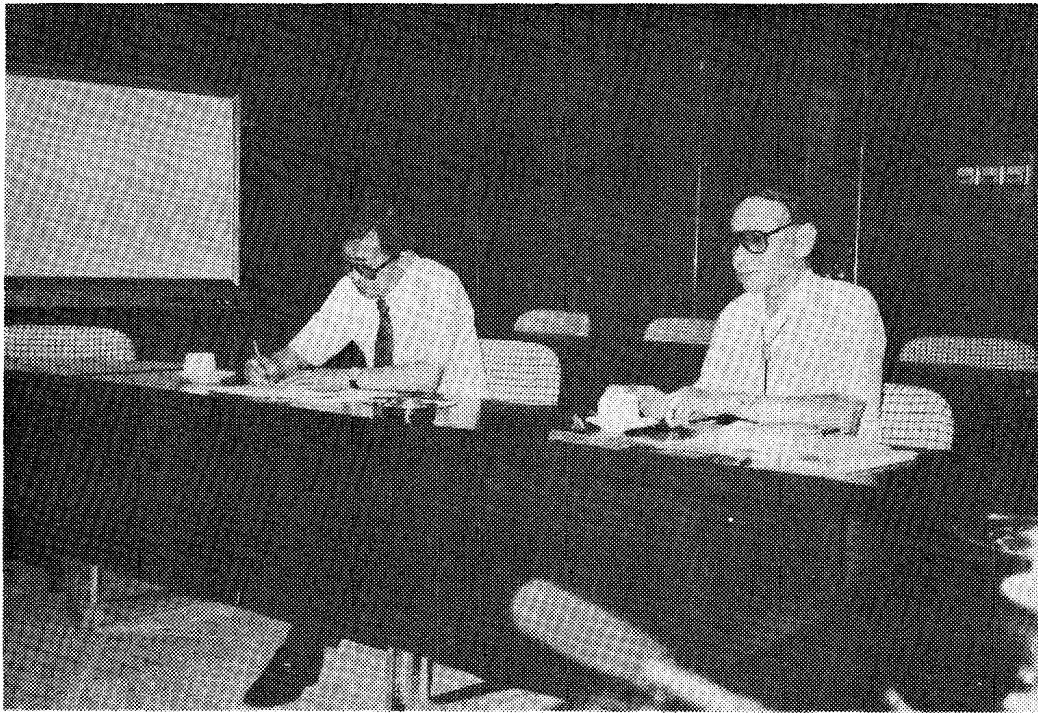
何れにしても、地元放送大学というものを育てて行きたいと真剣に思っている、各界の人達に集まって頂いて、グループを作ってもらってはどうか。放送大学を育てる会でもいいし、あるいは放送大学運営委員会とか、学習センター運営委員会とか、名前は何でもよいが、その地域の特性を活かしながら運営して行くにはどうしたら良いかということ、親身になって一生懸命に考えるようなグループを作ってもらってはどうかと、かねてから痛切に感じているところです。そういうものは、実際には、諏訪にも勿論出来てないわけなのですが、とても大事なことだと思います。

もちろん、将来、もし信州大学あたりから、講師を主として派遣してもらうことになれば、信州大学の方からも、そういう問題に関心があり、かつ、実際に動いてくださる方にも中に入っていただく。大学はもちろん信州大学だけではありませんので、他にもいくつかありますから、きっと呼び掛ければ、協力してくれる方々がそういう大学にもいると思います。

諏訪の圏域内には、ひとつも今のところ大学はありませんが、近い将来は、

ひとつ短期大学を作りたいというかなり具体的な話がありますし、更にもうひとつ話がありますので、そういうものができれば、放送大学と、そういう地元に来る大学とのコンタクト、例えば、単位の取り方についても最近論議されていますが、そういうところまで協力関係が出来れば、地域にとっても、すごくいいことだろうし、放送大学の視聴にもつながるのではないのでしょうか。

山中 本日は、先生方から、スクーリングについて、また今後の放送大学のあり方について、大変示唆に富んだお話をたくさん伺うことができました。お忙しいところを先生方、どうもありがとうございました。



ファクシミリによる学習指導（作歌・作句）を担当してー 川崎展宏先生に聞く

明治大学教授であり、放送大学の「作歌・作句」の講師を勤めておられる川崎展宏先生には、61年度1, 2学期のファックスによる作句指導の講師として今回の諏訪における研究にご協力いただいた。川崎先生は、ご都合により座談会に欠席されたため、後日ご自宅にお伺いしてお話を伺った。以下は、その時のインタビューをまとめたものである。

放送大学の広域化と地域の協力の重要性

放送大学の地域的拡大は、地元の協力を得なければ実現しないでしょう。学習センターを各地に設けるとなると、膨大な予算を取ることであり、不可能だと思います。特に理科系統の科目については、地方の大学に教育を依頼する以外には考えられないのではないのでしょうか。問題は、地元の大学がそれをすんなり受け入れてくれるかどうかですが、聞いたところによると、大学で非常勤講師をお願いしてやっている文科系の基礎教養科目的なものを、放送大学を受講することによって切り換えていくと大学の経営も安上りになるということで、そういうことで協力的な大学が出てくるかもしれないですね。

アンテナを余分につけなければ講座を視聴できないという体制自体、何か一つそこにずれがあり、機能的にすでに齟齬が生じているというような気がします。実験放送の時には普通のテレビで視聴できたのに放送大学になったら一万数千円出してアンテナを買わなければいけない。しかも、アンテナを切り換えても偶然うまく入るという以外はなかなかきれいに入らないですね。私のところでもゴーストがいっぱいはいるんですが、それでも電器屋さんが言うには、ここはよく入る方ですよ、全然入らないところもあるんですよというような具合です。こういうことは広域化の前に解決してもらえるといいですね。

作句指導の感想

私の担当は実作部門の俳句ということですから、作品のレベルを過大に要求する方が間違っているでしょう。また、俳句を作るということ自体は楽しくなければいけないし、楽しみのためには自分の一番歌いたいことを歌うことから始めなければいけないわけですから、いわゆる「孫俳句」というような句を作られるのも結構なのですが、また、それだけでいいと思われても困るのです。

句を作るということは大学というものと決して関係なくてもよいのですが、「俳句とは何か」ということが一貫してテキストのなかに述べられているわけですから、少なくとも、受講して作るという場合は、自分もまた「俳句とは何か」という根本の問いというものを持って作ることが大切でしょう。勿論、大学には関係なく、普通の俳人でも、詩人や歌人でもその問いを持って作るということは当たり前のことなのですが、そういう問いを持たなければいけないのだということを言い続けるために、大学という格好をつけたところでああした授業があるのだらうと私は理解しています。そのためには、ただ考えても分かるわけではないので、近代俳句の場合にはその歴史的なポイントだけは押さえておかなければならないというような観点でテキストも出来ているわけです。作って楽しいだけではなく、やはり「俳句とは何か」、また、近代における俳句とは何かということも心の中の問いに置いてもらいたいと思います。

俳句というのは基本的に和歌に対してこれをひっくりかえすというのが俳諧なのです。近代の主流になったのは正岡子規が提唱した写生ということで、心を押えておいて、対象を写す、つまり対象を通して思いを述べるという形になっています。孫が可愛いというのは、それは孫は可愛いのであってね、それで完結していることですよ。だから、孫が可愛いということを作品にしたら、たいがいショートケーキの上に砂糖をかけて出されるようなもので、たまったものではないですね。それでもやっている人が楽しければ一応それでいいのですが、自分のやっていることを人が見るとどうかと

ということがわかることが第一歩だと思います。

だから、2回目の添削指導の終りにも書きましたが、「自分のなかにもう一度作品を眺める人を持って下さい」ということに尽きますね。これは大変なことですがね。批評の究極ですから。

スクーリングの重要性

テキストというものは、なるべく間違いをおかさないように原典を時々引用してやらなければならないのですが、俳句に関して言えば、近代の原典そのものが現代にとっては非常に読みにくい言葉遣いを使っているわけです。子規の評論にしても、我々の持っている語彙よりもはるかに広い漢学の語彙を駆使して言っているわけですから、そうした原典を引用しても読みにくい。ですからテキストを読んでいっても、そういうところでつまづいて嫌になってしまうと思うのです。ですから、やはり、コメントが必要になってくるのだと思います。

放送番組のなかでそれをしようと思いましたが、私も放送の専門家ではありませんのでカメラを向けられるとしどろもどろになってしまいますし、うっかりしたことも話せませんので、そうした意味でも、本当は放送大学の講師も直接地域の人々のところに行ってしゃべることですね。でも、そのためにはそれをやりやすくしてもらわないとね。これは公的な事業なのだから講師たちは犠牲的にやれというような言い方ではちょっと無理だと思いますね。時間も随分かかりますし、地元の好意と誠意と、またその機関の予算ということもあるでしょうが、少しはゆとりのある予算を組まれないと大変やりにくいと思います。

放送大学はテキストは活字から受講者へ、また画面から本人へというように流れはいつも一方的ですから、学生と面接授業の形で直接接触することは大変意味があると思います。放送大学になじみができてくるでしょうね。受講者の声に接し、また現在は大学でももう余りないかもしれませんが、交流といったものが行なわれればより理想的だと思います。面接授業はやる側

からいうと大変ですが。

もうすでに地域の大学の公開講座などでやっているようですが、放送大学でも、講義というのは出来れば地元の先生方を主にして、それに放送大学所属の先生方も加わっていくという形が良いのではないのでしょうか。飯田先生のように、大変熱心で学生の中の人気も高く、非常に協力的な地元の先生方を、放送大学は百顧の礼をもってしてもお迎えすべきではないのでしょうか。ただし、そういう先生方に対して、放送大学の側が御陰をこうむっているのだという姿勢をこれからいつも持ってもらいたいものですね。放送大学という名前の権威をかざして地方の自治体の人々や地元の先生方に対ししたのではないかと思います。

私が諏訪で講演をした時には、皆さんよく聞いて下さったし、特に地元の方のおそらく乏しい予算でしょうが、そのなかの素朴なもてなしがうれしかったですね。

スクーリングは要らないのではないかという意見もあるということですが、教育や勉強というのはやはり苦勞しなければならないものですから、スクーリングに出るのが大変といっても、努力をしないで、家で座ったままでという精神ではうまくいかないのではないのでしょうか。確かに家にいてできた方がいいという面もありますけれど、すべての手間を完全に省いてあげようというのは一種の矛盾がある。地元の会場に足を運ぶことももったいないというのであれば勉強など止めればいいでしょう。

ファクシミリによる指導について

ミニ・ファックスはなかなか使いにくいですね。利点は勿論ありますが、それはそれとして、40センチずつ切って入れなければならないとか、続けて入れられないとか、送るだけで30、40分そこにじっとしていなければならないとか、もう少し使いやすいものがないですかね。家はポストが近いから、走って行って郵便を出した方が早いんですね。手紙ならば色を替えて添削することができますし。

ファックスを利用することが全然無意味だとは思いません。ファクシミリの場合には、少人数であれば、出てきた作品に一言でもコメントを加えられるという点で一つの面接の擬似的な意味を持っています。ですが、質問といっても口で答える場合と文字で答える場合とは大分違うので、質問に対して応答するとなるとこの負担は大変なものになるのではないのでしょうか。

私の場合、1回あたり一人2句で20数名の人の添削指導に、送り出すまでに全部で大体4、5時間くらいかかったでしょうか。通信作業そのものに毎回数十分かかりましたね。電話ははっきり言って相性というものがありますし、質問の仕方で無礼とか不愉快とか非常識といったことがあった場合には、こちらの対応も自ずからそうならざるを得ないけれど、ファックスの場合にはそれがわからないという美点がありますね。また、私の方では、機械がもたもたしていて退屈だと思っても、受ける方としては一種の接触感というのはあるようですね。

連絡のための一つの手段としては使えるでしょう。またファックスをしている先生は必ず実際に現地に行って学生たちと接し、ファックスのもどかしさをカバーすることができれば意味があると思います。機械がもう少し発達して高速ファックスになれば随分違うと思いますが、今はスピードがのろいですね。

（文責：塩 崎 千枝子）